

攻撃者への同一化とトラウマの連鎖 (2004年度公開シンポジウム報告 「トラウマ概念の再吟味 - 埋葬と亡霊 -」)

著者	森 茂起
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	6
ページ	34-39
発行年	2005-02-17
URL	http://doi.org/10.14990/00002534

攻撃者への同一化と トラウマの連鎖

森 茂起

攻撃者への同一化の構造

攻撃者への同一化という言葉は、実は新しい言葉ではありません。児童虐待の中で起こる現象を説明するときにも、攻撃者への同一化は、世代間連鎖を表すためによく用いられる言葉です。世代間連鎖とは、親から虐待を受けた子どもが、その攻撃を自分の中に取り込み、自分の子どもにも虐待を行なう現象です。今日のシンポジウムのテーマはトラウマという言葉の再吟味ですが、「攻撃者への同一化」という言葉をキーワードにして、トラウマ概念の拡張を試みてみようと思います。ひとつ注意したいのは、トラウマすなわち「心の傷」という表現はイメージ的に狭く限定されており、トラウマをめぐって考えなければならない現象は「心の傷」の範囲を超えて広がっていることです。トラウマという現象は、身体のレベルから心のレベル、そして思想や人生観といったものまで非常に幅広い問題を含んでいるのです。

では、まずトラウマをどう定義すべきでしょうか。『無意識の発見』（弘文堂）の著者のエレンベルガー（Ellenberger）が紹介している「災害」の定義が適当と思われるので、そ

れを引用しましょう。「しなければならぬこととできることとの間に、一瞬にして落差を生じしめる事件であって、外部からの援助の増加と、迅速にして最善の救援との必要があるもの」。つまり大変な事態が起こって対処しなければならぬけれど、必要とされるものが対処能力とかけ離れていて、到底当事者の力では無理であるような、周りからの援助がなければそれに対処できないような巨大な事件。そういうものを災害と呼ぶと。

この定義は災害について述べられたものですが、個人の受けるトラウマも、個人が受ける心の災害といえる側面があると思います。個人の心はいろいろな影響を受けます。個人はそれに対処し、何とか消化して自分の中に取り込んで自己を形成していくわけですが、対処能力をはるかに越えたものに襲われることがあります。そのとき起こる事態がトラウマ、心の災害と言えるでしょう。攻撃者への同一化とは、個人の対処能力を超える被害を受けたときに人が行なう一つの防衛方法でもあり、影響の残り方だと言えます。

攻撃者への同一化という言葉を初めに用いたのは、私が研究しておりますフェレンツイ（Sandor Ferenczi）です。彼は一九二〇年代から三〇年代にかけて、児童虐待が世間から注目されていかなかった時代に虐待被害者への臨床を行なうて、いかに子どもたちに対する性暴力が世の中に多いかということを訴えました。その意味で非常に先駆的な役割を果たした人です。彼の言葉を引用したいと思います。

「子どもは身体的にも道徳的にも絶望を感じ、彼らの人格は

せめて思考の中で抵抗するに十分な堅固ささえまだ持ち合わせていませんので、大人の圧倒する力と権威が彼らを沈黙させ、感覚を奪ってしまいます」。これは、子どもが性的被害を受けているときの状態を描写しているわけです。これに続く部分はこうです。「しかし、同じ不安がある頂点にまで達すると、攻撃者の意図に従服させ、攻撃者のあらゆる欲望の動きをくみ取り、それに従わせ、自らを忘れ去って、攻撃者に完全に同一化させます。同一化によって、いわば攻撃者の取り入れによって、攻撃者は外的現実としては消えてしまい、心の外部でなく内部に位置付けられます」。攻撃に耐える限界を越えてしまったときに、自分という存在は全く無力なものになる。そのときに、攻撃者側の意図や攻撃者の行動を読みとって、それを自分の中に取り入れてしまうと言うわけです。

フェレンツイは自らの臨床例に基いてこのように述べたわけですが、実際、児童虐待の被害に遭った子どもたちの行動を理解する上で、現在でも有効な考え方です。性的被害を受けた人は、その人自身が性的な欲求をもっていたのだ、だからそういう被害を受けたのだと誤解されることがあります。被害を受けた後に性的な逸脱行為が増加する、あるいは攻撃的な行為が増加する、そういった変化から生まれる誤解ですが、実際は、被害を受けたために攻撃者に同一化した結果であって、変化自体が被害の症状であると言えます。あるいは自分自身の被害を大したことではないと軽く見積もる傾向があります。出来事の甚大さに比して苦痛の表現が表面的で語ったとしても感情が伴わない。そのため、実際はそういう

被害はなかったのではないか、あるいはそれほど被害ではなかったのではないかと誤解されてしまう傾向があります。これも被害者が自己の欲求を無力化され、攻撃者に同一化しているために起こる現象と考えられます。

攻撃者への同一化には、恐怖の体験によってもたらされた自己の力に対する無力感、絶望感というものが根底にあって、その絶望感の上に攻撃者の考えや欲求が取り入れられるという構造があるわけです。被害者の根底的な気分には絶望感や無力感があるのは、臨床的によく見られることです。表面的には行動化をはじめ派手な症状があるとしても、治療によって扱われていくなかで、その底にある深い絶望感、無力感があることが治療上の重要なポイントになります。

さまざまな同一化現象

フェレンツイの考え方を出发点に攻撃者への同一化について考えてみましたが、この概念で説明できるのではないかと思われる現象はさまざまあります。たとえば、今日は簡単に触れるだけにしておきますけれども、DV被害があります。DVを受けている被害者は、攻撃した側の価値観や欲望に同一化してしまい、自分自身がその関係を望むような行動をしてしまう、あるいは攻撃者の欲求に沿うような行動をしてしまう、加害者が被害者に向けて言う、「おまえは無能だ」とか「おまえは何もわかっていない。」といった言葉を自分の中に取り入れ、自分を責める現象が起こります。被害者が攻撃者

に同一化する現象はDV被害でも起こっているわけです。

もう一つここで取り上げたい現象は、「ストックホルム症候群」です。ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、これは、一九七三年にスウェーデンのストックホルム市で発生した人質事件をきっかけにして生まれた言葉です。武装した二人組が銀行を占拠して、大勢の客のうち女性三人、男性一人を人質に取って立てこもる事件が発生しました。解放されるまでに六日間かかったということですが、その間に警察が犯人に対して呼びかけます。不思議なことに、そのうちに被害者であるはずの人質たちが、犯人をかばうような言葉を警察に対して向け、救おうとしている警察に反感を示しはじめました。結局、犯人は催眠ガスで投降しましたが、銀行から外に出るときには、人質は犯人と行動を共にし、中には犯人にキスする女性までいました。さらには犯人と婚約する女性までいて、実際に結婚したと書いてあるものもあります。そのあたりは正確な情報を得ておりませんが、この事件をきっかけにして、被害者が攻撃者に肯定的な感情を抱き、逆に、救出しようとする警察など、外部の者に敵意を抱き、そういう現象を「ストックホルム症候群」と呼ぶようになりました。

ストックホルム症候群について書かれているのを見ますと、その発生する条件として、被害者の生存が脅かされて恐怖が支配する中で、攻撃者の小さな親切が過大に評価される、また、攻撃者以外から完全に孤立していて周りの情報が入っていない、現実的に逃亡が不可能であるといったことが挙げられています。

このように見ますと、児童虐待あるいはフェレンツイの描写した性的被害の状況と非常に似た仕組みがあることがわかります。つまり、生命にまで危険の及ぶような危機的な状況と、全く逃亡が不可能になっている無力感という中で、その場にいる唯一の強者である攻撃者側に同一化することで自分を救おうとする現象と理解できます。

DVのような家庭内で起こる出来事についても、ストックホルム症候群という概念は有効です。さらに視野を広げると、いわゆるマインドコントロールという現象にも同じメカニズムが見出せます。日本ではオウム真理教事件において、カルト集団におけるマインドコントロールの問題が取り上げられました。ステイーブン・ハッサン (Steven Hassan) というマインドコントロールの研究者であり、脱カルトのカウンセリングを行なっている方がいます。ハッサンは統一教会の元信者であって、自らマインドコントロールから脱した経験をもとに、カルト集団の中でコントロールを受けている信者を救うためのカウンセリングを実践している人です。彼によると、マインドコントロールは、人格を解凍してバラバラにし、変革して再凍結するプロセスを巧妙に系統的に行なう手続です。さまざまな方法の中に、感情に対して働きかけるという要素があります。つまり、誰しも持っている恐怖感や罪責感を駆り立て、集団の外部にいる者は敵だという観念を植え付け、敵に対する恐怖感をベースにして、集団に縛り付け服従させるプロセスです。

ここにおいても、恐怖に直面して自己が無力化され、教団

の考え方や思想、あるいはリーダーの人格を取り入れて集団に同一化していく現象が見られます。マインドコントロールは非常に巧妙に仕組みられた一連の手続きであり、一時の暴力で起こるわけではありませんが、全体として攻撃者への同一化と同じメカニズムが働いていると思われれます。

フロイトが書いた有名な論文「集団心理学と自我の分析」を参照しますと、彼はこういった、集団に人が同一化していく現象——カルト集団はその極端な形です——を分析しています。フロイトは、軍隊と教会を典型例として分析して、集団への同一化は、リーダーを自己の内部に取り入れて理想としていくメカニズムと、メンバー同士が同じリーダーを共有することで同一化して一つの考え方を共有するという二つのメカニズムによって起こるとしています。

非常に簡単に言ってしまうと、フロイトの理論は、人間のもっているいわゆる愛——彼はリビドーという言葉を使いますが——、人に対する愛着を形成する欲求や欲望によって集団の同一化が成立するというものです。この理論は精密に考えられたもので、一定の集団現象をよく説明しています。ところが、先ほどのようなマインドコントロールやDV、人質事件において攻撃者に同一化する状況を考えてみますと、フロイトの言うような個人の欲求、欲望が動因となつてリーダーに同一化するメカニズムだけでは説明がつかない。むしろ、激しい暴力を受けることによって、自己が無力化し完全に崩壊したところに、別のものが取り入れられるというプロセスがあると考えられます。フロイトは恐怖に支配された中で

同一化を考慮に入れていなかったように感じます。

もう一つの理論を取り上げますと、フロイトの娘であるアンナ・フロイトも、攻撃者への同一化という言葉を使っています。フェレンツイより少し後のことですが、児童虐待における攻撃者への同一化現象を説明する最も古い理論としてよく引用されます。

彼女は、母親とか父親から激しい叱責を受ける子どもの例を出して、子どもは攻撃的な言葉を自分の中に取り入れ、それをほかのものに向けることで自分の中に起こる不安を処理しようとする、と説明しています。これは実際よく見られる現象です。ただ彼女の理論では、子どもの人格はあくまである程度のみとまりを持って保たれていて、そのまとまりを守るために攻撃者へ同一化が起こると考えられています。先ほどトラウマを心の災害と言いましたが、この場合、自分が全く対処できないような圧倒的な災害というよりは、ある程度対処できる程度の悪天候に対して生きていく方策であり、初めに述べたような攻撃者への同一化とはレベルが違うと思われれます。こう考えますと、攻撃者への同一化という言葉は圧倒的な恐怖感の中で自分を明け渡してしまうものから、ある程度自分で受け止めて処理していくレベルのものまで、幅広く使われていると言えると思います。

フロイトが例に用いている軍隊に話を戻しますと、フロイトは、リーダーの理想化、正義感の同一化という言葉で集団形成を説明しています。しかし、軍隊はそういうものを越えた恐怖に基づく支配も働く集団です。戦争によるトラウマは、シエ

ル・ショックという砲弾のショックによる戦争神経症から研究が始まりましたが、戦闘によるショックだけでなく、むしろ軍隊そのものの中にトラウマティックな働きを見出せます。つまり、戦闘以前の軍事訓練や上官と部下との力関係のうちに暴力的要素があつて、その中で兵士の人格が強制的に変えられていく作用が起こっていると思われれます。私の好きな映画で、ベトナム戦争の軍隊訓練を扱った『フルメタル・ジャケット』（スタンリー・キューブリック監督）という作品があります。ここには、過酷な暴力的訓練によって兵隊たちの人格が破壊されていくさまがよく描かれています。

こういった作用はあらゆる軍隊の中に存在したことでしょ。つまり、日常であれば適応的な自我のあり方が暴力的に破壊され、その代わりに別の価値観が植え付けられ、恐怖によって支配されるわけです。軍隊は戦争という特殊な状況で形成される集団ですが、平時に存在する集団にも軍隊的な要素を持つものが多くあるのではないかと思います。生命の危険だけではなく、職業的生命や社会的生命の危険という事態もあります。それらを危機に陥れる力を権力者がもつ場合、集団が軍隊的になって、成員の人格を破壊して暴力的な一体化、同一化を導くことがあります。学校という集団も、時には軍隊的働きをしてしまいます。

トラウマ現象を支える反復傾向

今まで、恐怖による他者への同一化という視点から、ストックホルム症候群やマインドコントロール、その他いくつ

かの現象を眺めてきました。これまでは攻撃者の人格に同一化する面のみを考えてきましたが、私自身は、フェレンツイが書かなかつた、もう少し基本的な別のメカニズムもあると考えております。

それは、暴力という刺激がもたらす、生物学的に説明できるような行動の反復傾向です。聞かされた言葉がそのまま刻印されて、他の人に向けるといった現象もここに含まれます。これは「トラウマ性記憶」としても理解できる現象ですが、私はこういった反復傾向をトラウマ性記憶だけではなく、条件反射のメカニズムや、人間の行動の習慣性といったものも含む、基本的な反復傾向として理解する必要があると考えています。

自己に対する否定的な考え方や見方も、いったん習慣化して自己を説明し始めると、繰り返しされる傾向があります。こういうものも反復傾向の一つといえるでしょう。たとえば、認知療法は自分に対する否定的な考え方を変えていく治療を行ないますけれども、そこでは反復する思考のパターンをターゲットにして治療が行なわれます。反復傾向全般をフロイトは「反復強迫」という言葉でまとめますが、この概念の妥当性の問題は別にしまして、人間には反復傾向があると考えることで、たしかに攻撃者への同一化の一面が見えてきます。

一方で、攻撃者の欲求や思想といったものに同一化する傾向、もう一方では、攻撃のパターンを反復していく、習慣化していく傾向、この二つが複合することで、攻撃者への同一化の現象が起ると考えられます。

反復はいろいろなレベルで生じます。身体レベル、イメージのレベル、物語レベル、理念レベルなどが考えられます。さきほど高橋先生が言われたような、ある物語が提供されるとその物語を取り込んで、自分という人間を説明する物語として使い続ける現象もこれらの一部に位置づけられます。人生観など高度なレベルでの同一化、宗教的な信念への同一化というもので、同一化には身体レベルから理念的レベルまであり、それぞれのレベルで攻撃者と同一化して、それが次の対象に攻撃として向けられさらに反復されていきます。

反復の形式もさまざまあります。世代間連鎖もその一つの形です。虐待を受けた子どもたちが攻撃的傾向を出しやすいう現象もそうですし、性的被害を受けた被害者が性的逸脱行為という形で症状を出しやすいうこともその一部です。あるいは、軍隊的な集団の中で体罰が行われているとき、体罰が上の世代から下の世代へと反復されていく。この反復の循環から抜け出せることは、よほど意識的にそれを止める努力をしなければ難しい。

反復による連鎖、同一化による連鎖は、小さくは個人から個人に対して、大きくは組織から組織へ、あるいは国家から国家へとというようにさまざまなレベルで起こります。ここで戦争まで対象を広げますと、戦争という暴力行為が発生したとき、たとえその暴力の当面の目的が達成されたとしても、暴力は相手の内部に植え付けられ、その暴力が次の世代や別の機会に他のところで再発する。こういう連鎖は、世界的に生じている紛争の至る所に見られるわけです。フェレンツイ

はこうした暴力の連鎖に強い関心を抱き、残酷性の血襲的連鎖、つまり血で血を争う復讐的な連鎖を止めるにはどうすればよいかを考え続けました。暴力の連鎖は虐待被害の症状としても現れますが、より広く、人と人の間の紛争というものが一般の中に現れるというのが彼の認識であったと思います。

こう考えますと、今日、過去の暴力の遺物として存在する攻撃者への同一化の蓄積は大変なものがあるでしょう。現在の戦争を見ていまでも、新たな暴力を次の世代へと連鎖させる作用が次々と起っているのが分かります。過去の暴力の負の遺産を、次の世代あるいは他の対象に連鎖しないような形へと消化することが、私たちすべての仕事です。しかしこの消化をやり遂げることは本当に困難なことでありまして、よほど幸運な場合には、自分の中で処理し、連鎖を回避することが可能でしょうが、多くの場合は連鎖を生み出します。一見連鎖していないように見える行為でも、消化しきれない代償としての行為である場合も多いでしょう。その場合、攻撃はいつの日にか別の形で現れてくるはずですよ。

戦争という巨大なレベルから、日常的な臨床場面で出会う児童虐待の影響まで、攻撃者への同一化を防止し、暴力の連鎖を断ち切ることが、今、私たちに与えられている普遍的課題ではないかと申し上げて、話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。